回転扉

能村　研三

探梅や海は見えねど海の風

柊をさすごたくさの世に生きて

春暁の夢に力を出し切りし

雪撥ねし竹のさやぎを見てをりぬ

虚と実の回転扉名残り雪

とれさうな釦をとりて実朝忌

料峭や理科室にある無聊感

利酒を舌に遊ばす余寒なほ

呪文めく接木最中の独り言

黒松が似合ふ建国記念の日

同齢の死

先師登四郎の五百字随想に「同齢の死」という随筆がある。

昭和五十五年、登四郎六十四歳の時に書かれたものである。登四郎と同齢で先に逝ったのは、俳優の加藤大介と森雅之であった。

あれから四十五年、平均寿命が延びた時代に、七十六歳の私と同年齢の方が相次いで亡くなったことにいささかのショックを受けている。私の生まれた時は戦後のベビーブーム期で、同世代は日本の経済成長を支えてきた。昭和二十四年生まれというと団塊の世代の最後の年代で、同時代を生きてきた親しみを感じるものである。

そのおひとりの伊藤伊那男さん。伊藤さんとは日暮里の本行寺で開かれる「一茶・山頭火俳句大会」の選者としてご一緒した。神保町の路地裏にあった「銀漢亭」は十七年営業されたそうだが、私も何度か伺ったことがある。いつもお店は混んでいて、立ち飲みもしくは路上飲みも楽しい思い出である。これも伊那男さんのお人柄を慕って皆が集まってきたのだろう。

島谷征良さんは、森岡正作さんが主宰する「出航」のお祝いの席で久しぶりにお会いすることできた。車椅子で奥様とご一緒であった。島谷さんは、大学を卒業する時に同窓の森岡さんと『卒業』という句集を出され、登四郎の許に挨拶に来られた時、初めてお会いした。この出会いこそ、私が俳句の道へ進むきっかけとなったのである。

田草川信慈さんは私が勤務した役所の同僚で、同じ技術職でありながら、市川の文化の魅力を生かした街づくりを推進する役割を共に担った人である。詩人の宗左近さんを顕彰する「市川の文化人・宗左近展」を開催したり、文化に根差した街づくりにアイディアを出しあった人で、この人と出会うことが出来たのも私の役所人生を豊かにしてくれた。

昨年から今年にかけて、三人の同齢の人たちが亡くなったのは本当に残念なことで、謹んでお悔やみの気持をささげたい。

登四郎も「同齢の死」の文の最後に「同齢の死というものはなぜか身辺が落莫としてくるものである」と書いている。

能村　研三